



南葵音楽文庫ミニレクチャー

ロシア音楽と和歌

～プロコフィエフとその周辺～

近藤秀樹

2018年12月2日(日) 11:00

南葵音楽文庫閲覧室(和歌山県立図書館内)

南葵音楽文庫
和歌山県立図書館内
和歌山市西高松 1-7-38
tel. 073-436-9500



<http://designroomrune.com/magome/daypage/07/0722.html>



<http://blog.livedoor.jp/bookshell/archives/1288022.html>

はじめに: プロコフィエフの来日

- ロシア革命の騒乱を逃れ、1918年、日本を経由してアメリカ合衆国に渡る。
- 南米に向かう船に乗り遅れたため、次の船を待って2ヶ月ほど日本に滞在。(5月31日に日本に到着。8月2日に離日。)
- 日本に滞在中、東京(7月6日、7日)、横浜(7月9日)でピアニストとしてリサイタルを開催。
- 7月2日以降、音楽評論家の太田黒元雄(1893-1979)と交友。
- 徳川頼貞と合い(7月12日)、頼貞からピアノソナタを注文されるも、作曲せず。[勘違いゆえのすれ違い?]
- 頼貞にピアノ曲〈スケルツォ〉(作品12-10)の楽譜(献辞あり)を贈る。

1. プロコフィエフとバリモント(1): 彼らは七人

- 太田黒元雄「プロコフィエフの印象」
近作のひとつ(カンタータ《彼らは七人》)を語った延長線上で詩人バリモントに言及。
バリモントの来日(1916年)と、彼の「日本礼賛」が話題に上る。
- プロコフィエフ「日本滞在日記」
尾瀬敬止(1889-1952)に会う。バリモントから預かってきた手紙を渡す。

- コンスタンティン・ディミトリエヴィチ・バリモント
(Константин Дмитриевич Бальмонт, 1867年 - 1942年)



ロシア象徴主義の詩人・翻訳家。
「銀の時代」を代表する文人の一人。
その詩は、同時代の多くの作曲家によって取り上げられ、
音楽化された。

<https://gpeople-russia.ru/article/konstantin-dmitrievich-balmont>



▲バリモントの詩集『火の鳥』

<https://thestoryreadingapeblog.files.wordpress.com/2017/08/zhar-ptitsa.png>

- プロコフィエフとバリモント
プロコフィエフはバリモントの詩で多くの作品を書く。
1916年以降、詩人本人と交友。
《ピアノ協奏曲》第3番はバリモントに献呈。
ピアノ曲集《束の間の幻影》の題名はバリモントの詩に基づく。

- バリモントとロシア音楽
同時代のロシアの多くの作曲家たちが、
バリモントの詩で曲を書いた。
Cf. スクリャービンに対するバリモントの思想的影響

2. ロシア音楽と和歌

- バリモントと日本
日本文化に深い関心。→1916年に来日。雑誌に日本に関する記事を掲載。
山口茂一の協力を得て、短歌の研究、紹介、翻訳に取り組み、ロシア語での短歌創作も試みる。
Cf. ロシア象徴主義詩人たちの短歌への関心
- ロシア音楽と短歌
和歌のロシア語訳に曲をつける試みが、1910年代以降のロシアで複数の作曲家により行われる。
Ex, ストラヴィンスキー、チェレプニン、イッポリトフ=イワーノフ etc.
- ストラヴィンスキー 《3つの日本の抒情詩》
バレエ音楽《春の祭典》作曲直後の作品。
小編成の室内アンサンブルによる伴奏。←シェーンベルク《月に憑かれたピエロ》の影響
A. ブラント訳を使用 (ハンス・ベートゲによる独訳からの重訳)。仏語訳はモーリス・ドラージュ。

3. チェレプニンとバリモント



- ニコライ・チェレプニン(1873-1945)
リムスキー=コルサコフの弟子。プロコフィエフの指揮法の師。
フランス近代音楽の影響を受ける。
ディアギレフ率いるロシア・バレエ団で指揮を担当。
1921年にフランスに亡命、パリで没した。
プロコフィエフ「自伝」、大田黒「印象」に言及あり。
代表作: バレエ音楽《ナルシスとエコー》(1911年)

Cf. 息子のアレクサンドル(1899-1977)も作曲家。1935年に来日。日本人作曲家を対象とした作曲コンクールで伊福部昭(1914-2006)を世に出す。

<https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/c/c4/Nikolai-Tcherepnin.jpg>

- チェレプニン《7つの日本の抒情詩》

ピアノ伴奏の歌曲。バリモント訳を使用。

凡河内躬恒から与謝野鉄幹まで、幅広い時代の作品から選択。

バリモント訳の特徴: 五行に分けるが音節数にはこだわらない。

1927年にパリで初演。

初演者: ニナ・コーシツ(ソプラノ)と作曲家(ピアノ)



▲ 凡河内躬恒

▲ チェレプニン《7つの日本の抒情詩》第1曲 冒頭部分

No. 1, Andante

Весенней ночью,
Цветущей сливы
Сокрыт расцвет,
Не видно краски,
Но слышен дух.

(Осиночи-но-Мицунэ 9-й век)

一
春の夜の
闇はあやなし
梅の花
色こそ見えね
香やは隠るる

凡
河
内
躬
恒

4. バリモントとの再会と別れ: 蝶々

- ピアノ協奏曲から歌曲集へ

プロコフィエフはバリモントとフランス・ブルターニュで再会 (1921 年)。

《ピアノ協奏曲》第 3 番を完成、バリモントに献呈。

→協奏曲の一部を詩人に弾いて聴かせる

→そこから靈感を得てバリモントは「蝶々」を書く

→「蝶々」を含む新旧五編の詩に作曲、歌曲集《5 つのバリモントの詩》を完成。

- バリモントとの別れ

祖国に対する態度の違いから、2 人は決裂。

プロコフィエフはソ連に戻る(1936 年)／バリモントはフランスで貧窮のうちに世を去る(1942 年)

- 蝶々

《5 つのバリモントの詩》作品 36 第 3 曲。

第 1-6 行: ひらひらと飛び、花の上で眠り入る蝶々 無邪気で明るく儂い自然

第 7-8 行: 苦しむ人間の魂

おわりに

○主要参考文献

大田黒元雄「プロコフィエフの印象」、『水の上の音楽 (第一訳著集)』音楽と文学社、1919 年。

松本隆志「ロシア象徴派と日本短詩型文学」、早稲田大学多元文化学会編『多元文化』6、2017 年。

プロコフィエフ「日本滞在日記」、『プロコフィエフ短編集』

サブリーナ・エレオノーラ／倉田菜穂子訳、群像社、2009 年。

プロコフィエフ『自伝／随想録』田代薫訳、音楽之友社、2010 年。

Tetiana ZOLOZOVA: Prokofiev et ses mélodies de la première période,
in *L'Oeuvre vocale et dramatique de Prokofiev*, Broché, 2006.

CD: *Nikolai Tchernin Songs*, Toccata Classics [TOCC0221], 2014.